

講演 「本」って何？

—メディアとしての書物—

2. いろいろな書物のかたち

河島茂生

2.1 はじめに

若松昭子先生から書物(book)一書かれたもの—の歴史にかんする話がありました。私は、僅か20分程度の時間ですが、若松先生のお話を踏まえ、いろいろな書物のかたちに注目してお話させていただきたいと思います¹⁾。まず、聖学院大学の総合図書館から借りてきた展示品のいくつか見ていながら、書物にはさまざまな形態があることを説明させていただきます。展示品は、実験タイムに入るまでの間、前に陳列しておきますので、お時間のあるときにぜひ近くをご覧ください。書物の多種多様なかたちを説明した後は、聖学院大学の学生が作った絵本の素材がありますので、みなさんと一緒に簡単な本作りをしたいと思います。折りたたむだけで書物が作れる素材です。書物は、大掛かりな装置を使わなくとも簡単に作れることを実感していただければと思います。

2.2 展示品の紹介

それでは、展示品を順に紹介していきましょう。展示品の特徴を中心にお話しさせていただきますので、体系だった説明でないことをご容赦いただければ幸いです。

最初は巻物(scroll)です(図2-1)²⁾。巻物は、紙を巻くかたちで作られた書物です。ここでは、『源氏物語絵巻』のレプリカ(replica)をもってきました。『源氏物語絵



図 2-1 巻物

巻』は、紫式部が書いた『源氏物語』に絵を付けた巻物です。平安時代末期のものが最古だといわれております。2千円札の絵柄にも使われましたね。

若松先生が指摘されたように、巻物という形態は、読みたい個所を探しにくいなどの欠点がありました。そこで、その欠点を解消するかたちとして、冊子体(codex)が開発されていきました。1世紀ごろから次第に書物のかたちが巻物から冊子体が変わっていったのです。4世紀後半以降になると、書物は冊子体が主流になっていきました。

冊子体が変わったといっても、長い間、書物の製作方法は写本でした。修道院の写字室や都市の工房などで、1文字1文字書き綴られて写本が作られていきました。しかし、写本は、手書きであることもあって、精確に原典を書き写すことは難しく、また製作にお金と時間がかかりました。そこで、活版印刷術が開発されました。活版印刷術とは、活字(movable type)を組み合わせた版にインクを塗って印刷する技術です。精確かつ大量に書物を生産することを可能にしました。

次に紹介する書物は、その活版印刷技術によって作られた世界初の聖書のレプリカです(図2-2)。この書物は、活版印刷術の発明者J. Gutenbergによって印行されたため、一般的に「グーテンベルク聖書」(Gutenberg Bible)と呼ばれています。若松先生のお話にも出てきましたよね。グーテンベルク聖書は、15世紀半ばに作られました。活版印刷術で作られましたが、写本に似た装飾が施されていました。グーテンベルク聖書は、42行で行組みされた聖書が多く、42行聖書と言われることもあります。

なお、今回は、金属製の活字も展示して

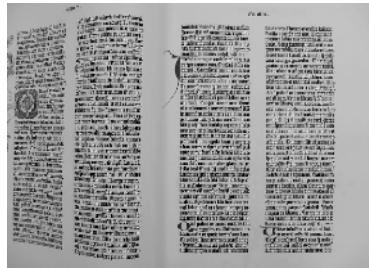


図 2-2 初期の印刷本

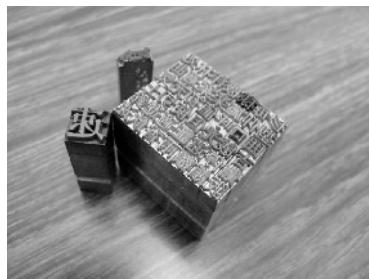


図 2-3 金属製活字

おります(図2-3)。漢字が反転したかたちで金属に刻まれております。このような活字を組み合わせて版を作るんですね。

17紀の書物も展示しています(図2-4)。これは、レプリカではなく、実物です。およそ330年前に作られた本です。日本でいい

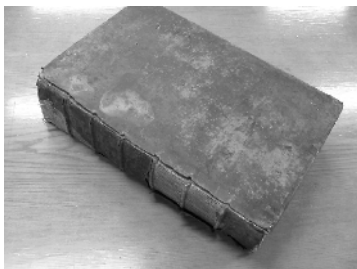


図 2-4 17世紀の書物

脚したころですね。グーテンベルク聖書と同じく、これもかなり重厚な作りとなっております。表紙は、革素材でして、重量のある表紙で出来ております。若松先生のお話にありましたように、書物は、昔パーチメント(parchment)を使ってできていました。動物の皮をなめしたものです。パーチメントは、反ったり、しわがよりやすかったりしました。そのため、重量のある表紙をつけて、パーチメントを押さえつけ伸ばしていました。いま紹介している書物に重い表紙がつけられているのは、その名残だと思います。背に突起もあります。これは、この時代に西欧で広く見られた「背バンド綴じ」で紙がまとめられていることを表しています。

ブックデザイナー(book designer)の仕事に見られるように、書物は、美しさが求められる面があります。そのことは、美装本に先鋭的に表れているでしょう。美装本とは、デザインにこだわり、素材や紙にもこだわり、美しい装幀が施された本をいい



図 2-5 美装本

ます。豪華な製本がなされています。ここに展示してある美装本も、金色にキラキラ輝いていますね(図2-5)。

次に、和装本も見ていきましょう。装丁の様式を大まかに分けると、洋装本と和装本があります。いま一般的に広く普及している装丁は洋装本ですね。書店や図書館で置かれている書物は、ほとんどが洋装本です。洋装本は、その名

前の通り、西洋において採られた製本様式です。それに対して、日本で古くから使われていた装丁が和装本です。和装本は、いくつかの装丁の総称ですが、糊を使わず背表紙を持たず、そして表紙と本文の紙の大きさに違いがありません。近年の洋装本が本の背表紙を手前に向けて立てて収納される

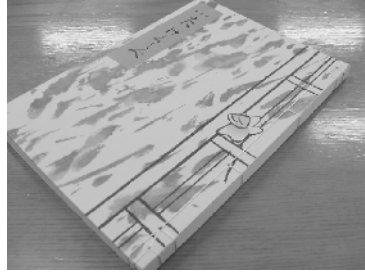


図 2-6 4つ目綴じ

ることが多いのに対し、和装本は横置きで置かれました。中国の漢書の流れを引いていると考えられております。ここに持ってきましたのは、『たけくらべ』（樋口一葉 著）のレプリカで、4つ目綴じという装丁方法がとられております(図 2-6)。4つの穴をあけ糸で紙束を綴じて本にします。和装本のなかでは、折り本もよく知られていますね³⁾。折り本は、一定の幅で交互に紙を折り畳んで作られます。社寺の経典に使われている方式ですね。

書物は、これまで長い間紙の力に支えられてきました。昔は、亀の甲羅や牛・鹿などの骨に書かれていましたが、今また紙以外の物質を素材として書物が作られてきて

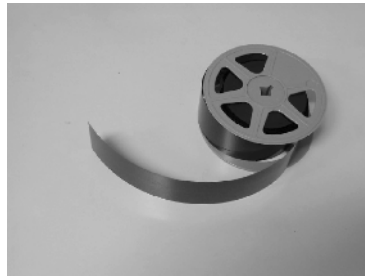


図 2-7 マイクロロール

います。マイクロフィルムも発明されましたし、デジタル媒体でも書物が作られるようになってきました。ご存知の通り、いろいろなタイプの電子書籍が開発されております。ごく最近では、携帯小説も生まれましたね。2007年には、『恋空』などの携帯小説が次々とヒットすることになりました。

ここでは、時間の関係上、マイクロフィルム(microfilm)だけを取り上げましょう。マイクロフィルムとは、原本となる資料を撮影してフィルムに転写することによって、より小さなサイズで長期にわたる資料保存を可能にしたものです。マイクロフィルムは、マイクロロール(roll film)とマイクロフィッシュ(microfiche)の2種類に分けられます(図版2-7)(図版2-8)。マイクロロールはフ

フィルムがロール状のかたちになっている媒体で、マイクロフィッシュはフィルムが1枚ずつのシート状になっているものです。展示品としては、マイクロフィッシュを用意しています。近くで凝視すると分かりませんが、シート状のフィルムに原版となる資料の焼き写しを基盤目状に配置したものです。縮小して転写しているため、小さすぎて肉眼ではフィルム状の画像や文章などは読めません。専用の機械マイクロフィルムリーダーが必要です(図2-9)。

続いて、書物のサイズに着目して、バラエティに富んだ書物を紹介していきましょう。書物は、大きなものから小さなものまで大小さまざまです。

まず、大きい書物からいきましょう。図書館では、A4サイズよりも大きな書物は大型本として取り扱われることが一般的ですが、もっともっと大きな書物があります。

一番大きい書物だとギネスブックに記載されている本は、*Bhutan*という本です。ブータン王国の写真集ですね。卓球台ぐらいの大きさがあります。ページをめくる仕草は、手だけではなく、まさに卓球をやるように体を使います。重さは、およそ60kgあります。価格は、約2万5,000ドル、日本円にして250万円近くいたします。驚いたことにAmazon(<http://www.amazon.com/>)で購入することができますので、資金力のある方、資料を置くスペースのある方はぜひ！どうぞ。

大きい書物について話しましたので、今度は小さいほうの書物を紹介しましょう。豆本(miniature book)を持ってきました(図版2-10)。豆本は、だいたい

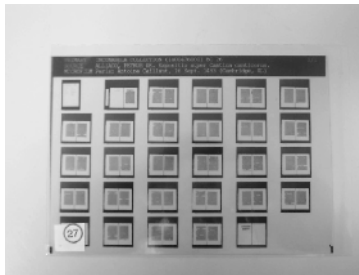


図 2-8 マイクロフィッシュ



図 2-9 マイクロフィルムリーダー

掌サイズよりも小さい本の総称でして、豆のように小さい本であることから、その名がついております⁴⁾。あまり実用性はありませんが、遊び心で作られていましてユニークなものが多いですね。



図 2-10 豆本

豆本をさらに小さくしていくと、マイクロブック (micro book) という呼ばれる書物になります。マイクロブックは、縦横10mm(1cm)以下の本です。豆本が誕生して以来、「いかに小さな本を作るか」という競争が行われていまして、いまは1mmを切ったレベルで勝負が行われております。小さな本を作れば、それだけの高度な印刷・製本技術があることを示せます。そのため、企業が力を入れて作ります。

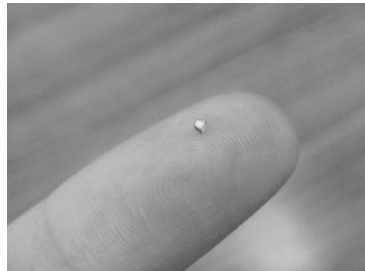


図 2-11 マイクロブック

ここに持ってきたのは、サイズが1mm以下の0.95mmサイズの書物です(図版2-11)。日本の印刷会社である凸版印刷株式会社が世界最小の印刷物を目指して製作したものです。大きさとしては、喩えとして不適切かもしれませんが、ほんとうにホコリのような小ささです。へその「ゴマ」のような小ささといってもよいかと思います。十二支(とり、いぬ、ひつじ、うま等)が印刷されています。さすがに、これは手に持って示しても見えないので、後で近くに寄ってルーペを使ってみてくださいとお願いします。

2.3 絵本作り

さて、これまで、いろいろな書物のかたちを紹介してきました。ここで、みなさんに簡単な本を作ってもらいましょう。

聖学院大学の図書館情報学課程の学生が絵本の素材を製作しました(図2-12)(図2-13)⁵⁾。この絵本は、専門図書館を分かりやすく説明したものでして、

特集：ひらめき☆ときめきサイエンス「本を解剖する」

学生が取材から編集までを手掛けた素材となっております。その素材を使って、書物を作りましょう。出版社や印刷会社を通さなくとも、書物を作ることはできます。簡単な書物をつくることで、身近に書物を感じていただければと思います。

作り方を説明します。少し耳を傾けてくださればと思います。配布したA4の紙1枚を手にとってください。最初に、絵の境目に沿って8等分に紙を折って折り目をつけます。次に、A4の長いほうが横になるように持って、絵本の面が表に出るように折り目で上下に折ります。そのあと、両端を持って真ん中に空洞ができるように両端を寄せます。最後に、「たかしの宿題」とタイトルがついている面を一番上にするようにしてください。これで、一冊の本が出来上がります(図2-14)。

これまで若松先生と私は、書物の内容を脇に置き書物の形態について話をしてきました。これから、清水均先生の講演を通じて、書物の内容についても考えていきましょうね。

それでは、私の話は、このあたりで。



図 2-12 絵本の素材(表)



図 2-13 絵本の素材(裏)



図 2-14 絵本の出来上がり

注

- 1) 本講演録は、実際の講演内容に加筆・修正を施した記録です。
- 2) 巻物は、卷子本や巻本とも呼ばれます。
- 3) 折り本は、帖装本とも呼ばれます。
- 4) 芥子本や袖珍本、寸珍本、雛豆本と呼ばれることもあります。
- 5) 「学生が絵本「ひらめきときめき図書館さがし」を制作しました」

http://seigakuin.d2.r-cms.jp/blog_detail/blog_id=1&id=21, (accessed 2009-03-01).

